



Title	ルイ＝セバスチャン・メルシエ『紀元2440年：至上の夢』における「政治家」の理想
Author(s)	阿部, 悠太
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2025, 58, p. 75-92
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100911
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ルイ＝セバスチャン・メルシエ『紀元2440年： 至上の夢』における「政治家」の理想

阿部 悠太

キーワード：メルシエ／『紀元2440年』／啓蒙／ユートピア／政治

はじめに

ルイ＝セバスチャン・メルシエが1771年に出版¹⁾した『紀元2440年：至上の夢²⁾』は、25世紀パリの理想社会を夢に見た語り手の紀行文であり、これまでには現実に対置される理想を描くことで逆説的に現実社会に向かう批判意識や、その思索の教育的側面が指摘されてきた³⁾。例えばクリシャン・クマーがそのユートピア的構想を「伝統に忠実でむしろ保守的なものでさえあった」というように、これはプラトン以降のユートピアの伝統からして珍しくないが、新天地ではなく未来に理想社会を設定した点は新しく、クマーもこれを「新しい試み」としている。しかし彼はその新たなアプローチの着想について、「おそらくフランス革命と産業革命に象徴される経済的・社会的・政治的変動と結びついている」とそれ以降の歴史的文脈を考慮しながら理解することを勧めつつ、明確ではないとの結論に留めている⁴⁾。

本稿ではこの「新たな試み」に目を向けるため、未来の形式とその形式を実現する手段としての「夢」の分析から始める。本稿が目指すことは、形式の分析を通じて得られる作家の関心に焦点を当て、その上で内容を吟味することで、連続性の乏しい多数の章の羅列からなる、一見すると事典的な著作にも思われる本作に通底する作家の思想を抽出することである。

1. 理想社会の計画

1-1. 夢をみることによる時間的跳躍

「夢」« rêve » は本作を形式的に特徴づける重要な要素だが、リトレによればその定義は「イメージやアイデアの無意志的な組み合わせで、しばしば混乱しているが、時には非常に鮮明で筋が通っており、眠っている間に心に現れる⁵⁾」ものである。本作でもこの定義や一般的な理解から外れることはない。メルシエは「夢を見ること」について注釈を付し、「眠っている間にある物事をまざまざと思い出すのは、それから強く想像力を打たれたからにほかならない⁶⁾」と述べる。また夢の定義については、「空想」« chimère » との比較を通してより理解できよう。

[...] この上なく正確な観察によって、[...] 私たちは数多くの蔵書が、極めてひどい突飛さと、もっとも分別を欠いた空想 chimère の集まる場であることを発見したのです。(CM, 163-164)

ここで突飛で無分別とされる「空想」は、フルティエールの定義通り「人が心中に抱く虚しい空想や、[...] 人が抱く根拠のない見込み、そして一般的に、全く現実的で確かなものではないあらゆるもの⁷⁾」を指している。

つまり、本作では「夢」が現実の延長線上に存在するのに対して、「空想」は非現実的で再現性の無いものとして扱われ、一方が作品の形式として採用され、他方は痛烈な批判の対象となるのである。こうして夢の形式は18世紀当時に作家が目当たりとした実社会との時間的な連続性の中に理想社会を置く役割を果たすことになり、ゆえに本作は空間的な跳躍を描く「ユートピア」である以上に、「ユークロニア⁸⁾」作品といわれる。ここに見える彼の現実性への意識はのちに主著となる『タブロー・ド・パリ』にも引き継がれているように思われるが、⁹⁾ その意識の理由としては、例えば「新大陸」

の発見にかかわるメルシエの意識が挙げられよう。¹⁰⁾ いずれにせよ、彼にとって理想の新天地の発見はもはや実感を伴わず、夢の形式によってしか「真実味」を認めることができなかった。¹¹⁾

1-2. 計画にまつわる批判

次に問題となるのは、形式がどのように内容に関わるかという点である。夢は「強く想像力を打たれ」ることで「思い出す」活動だが、本作においては冒頭の老英国人との対話が語り手の想像力を打ち、夢の世界へ至るためのトリガーの役割を果たす。

私は彼 [= 老英国人] にこう言った。「あと何年かすれば、おそらくもう何も望むことなどなくなるでしょう。ただしそれは、これまでに考え出されたさまざまな計画 *projects* をくまなく遂行することが可能であればですが...

彼は私に向かって言った。「ああ！あなたの国民の癖が出て来ましたよ。いつも計画 *projects* ばかりだ！そしてあなた方はそういうものを信じている！あなたはフランス人だ。あなた方の良識と一緒に、その土地の流儀を得てしまったようですね。」(CM, 33)

この後、眠りについた語り手は夢を見て、つづく第 2 章「私は 700 歳だ」で夢の世界に目覚める。ここで語り手の想像力を打ったのは老英国人によってもたらされた「計画」« *projet* » への批判意識である。のちに語り手は理想社会の案内人に対して「私たちの時代は、無数の計画 *projects* の時代でした。あなた方の時代は実行の時代ですね。素晴らしいことです」(CM, 54) と言い、実行されない計画ばかりの「私たちの時代」(18 世紀) について「あなた方の時代」(25 世紀) という「実行の時代」との比較の中で批判的に言及する。先の引用で老英国人をあきれさせた語り手の「計画」はまさに、ここで批判された 18 世紀的な皮算用である。

作家および語り手の懸念は、18世紀フランスにおいて実現性のない—少なくとも実行されることのない—無数の計画が立てられていることにあった。この文脈は先述の形式選択と共鳴している。実際には未来を舞台にした小説を書く以上、本作で描かれる社会は虚構にほかならない。それでもなおメルシエは、理想社会において一貫して18世紀的な空想を退けようと努めているように思われる。それは突飛で実現性がない計画は否定されるべきであり、計画とは実際に実行されるべきものだからである。ここまで確認した「夢」と「計画批判」にかかわる文脈は、形式と内容の両面におけるメルシエの現実性に対する意識の表れであると言えよう。

ただし、この批判が18世紀的な「計画」を対象としたものであって、「計画」そのものに向かう批判ではなかったことには留意せねばならない。

なるほどたしかにこの作品 [=テレマック] には、より広い知識や、より深い理解を欠いています。しかし単純さの中に、なんとという力強さと、高貴さと、真実があることか！私たちはこの作家 [=フェヌロン] に匹敵する作家として、善良なサン=ピエール神父の諸作品を置きました。彼の筆に勢いはありませんが、心は高尚でした。七世紀もの時間が彼の偉大で美しい思想に、適切な成熟をもたらしました。全くの空想 chimères を抱いていたのは、彼を妄想家だと嘲笑した人々でした。彼の夢 rêves は現実のものとなりました。(CM, 171)

25世紀の王立図書館の洗練された書架を訪れた語り手に、案内人はその蔵書を紹介する。彼はその中でフェヌロン¹²⁾ やサン=ピエール¹³⁾ を挙げて、その単純さの中にある力強さ、高貴さ、そして真実が評価されることを語り手に伝える。作家らの作品に瑕疵があることを認めながらも、そこに内包される真実や強さ、高貴さとその成熟の可能性を評価するこの考え方は、エピグラフに掲げられたライプニッツの一節「現在は未来を宿している」を思わせる。メルシエは現状が抱える改善の余地を認識しながらもその難詰に拘泥

することはなかった。それ以上に彼は未来を志向し、計画の実践へ向けた観察と成熟を重視したのである。

1-3. 「政治家」と「計画家」

「政治家」« homme d'État »の語は、計画とその成熟に関するメルシエの主張をもっとも象徴的かつ端的に反映している。彼は計画の成熟を理想実現の手段とする主張を、「政治家たるべき」という比喩に置き換える。

彼ら [= 経済学者] は認めねばならない。[...] 計画 projet を十分に成熟させなかったこと、そして政治秩序の中ではすべてが密接に繋がっているにもかかわらず、計画を切り離れたことを。計算ができるだけでは十分ではない。政治家 homme d'État でなければならないのだ [...]。
(CM, 136)

ここでメルシエは輸出法¹⁴⁾ について「彼ら [= この法律の支持者である作家ら] は急ぎすぎている」ために「その制度は現在のところ悪い」と述べる (CM, 136)。前節で述べた通り、ここでも不完全で未熟な計画が否定されている。

また「政治家」« homme d'État »と「計算ができる人¹⁵⁾」« calculateur »の対比は、メルシエが提示する「政治家」概念の理解を助けてくれる。「calculateur」は性急な判断とそれによる計画の未熟さが疵であり、見通しはよいが検討に乏しい人とされる。つまり「政治家」として計画に成熟をもたらすとは、単に既存の原理や仮定の行く末を読む行為に過ぎない、構想を持つことではないのだ。それゆえ引用文中の経済学者 économistes や「計算ができる人」は 18 世紀的な「計画家」として「政治家」に対置される概念であり、ここで拒否されているのである。

ここでメルシエが啓蒙主義的な社会改革によって民衆に対する社会的・政治的な上層からの啓蒙を目指し、その関心を政治的な話題に換言することは

18世紀の思潮からして特別なことではないように思われる。一方でメルシエの提示する「政治家」概念は注目に値する。というのも、『紀元2440年』において「政治家」の語は、必ずしも政治的文脈にとどまらない、より広義の概念としての意義を持つからだ。それはメルシエが改革の核となる強力な原理と考えた概念であり、改革の基本理念としての比喩的・象徴的な「政治家」である。

2. 政治体制

2-1. 諸体制の否定

第36章は「政体」*« Forme du gouvernement »*と題され、語り手が現地人に対して理想社会の政体を尋ねる場面に始まる。しかしながら理想の「共和国」*« République »*は既存政体の否定によって示され、明確な定義はなされない。「王制でも、民主制でも、貴族制でもありません」(CM, 223)。これが王制か民主制か貴族制かと尋ねた語り手への返答である以上、必ずしもここで挙げられた三政体への明確な批判意識による返答とは言い切れないが、18世紀的な政体が否定されるのだから、否定される政体とその理由を列挙しながらメルシエの理想の「政治」の輪郭を探ることはできよう。

王制については「王制の国々は[...]専制主義 *despotisme* に呑み込まれて行き、そしてやがてその専制主義も自壊するに至ります」(CM, 223)とし、王制と専制を時間的に連続する同一の批判対象として扱う。なおメルシエは王制を批判する一方で首長の存在を認めているが、これについては後述することにして、ここでは王制批判の文脈にのみ触れる。

また貴族制について、*« aristocratique »*の語は先の引用における二回しかその使用が認められないが、貴族 *noblesse* については肩書ばかりで虚栄心にまみれた惨めな階級であったとされ (CM, 230)、理想社会においてその称号は「個人的なもので、世襲でも金で動くものでもない」(CM, 50)ものとなっている。あるいは後述する専制批判の引用を鑑みれば、寡頭政治に対す

る批判意識に包含されるとも考えられる。

民主制についても « démocratique » の語は先の二回しかその使用が確認できないが、その否定の理由についてはメルシエの民衆へ向かう批判意識が挙げられよう。彼はローマについて、「世界に抑圧の鎖を広げた」「忌まわしい共和国」であり「恐るべき専制主義」の国とするが、ここで特筆すべきは「人間の自由を破壊し、結局は自身らの自由まで打ち壊してしまった人民」や「自身の横暴が傲慢であったのと同じくらい臆病な隷従を示した人民」といった、国家に対置される民衆への批判の文脈である (CM, 282)。メルシエは専制的な社会における被支配者層であってもそれを哀れな被害者とは考えない。理想社会は三権分立や多数決の原理が採用された民主的な社会だが、それでもここで民主制を否定するのは、不条理に隷従し主体性を失った18世紀の民衆が政治の主体となることへの強い忌避感によるだろう。

そして何より専制に対する批判意識は顕著である。

専制的な政治は、他のすべての者を騙し、財産を奪うための、少数の優遇された人々と君主との同盟に過ぎない。そのとき、君主もしくはその代理の者が、社会を覆い隠し、分裂させ、唯一の中心的な存在となり、あらゆる情念を思いのままに灯し、その情念を自分の個人的利益のために使う。(CM, 225)

少数の支配階級への不当な権力集中に対する批判意識は貴族制の否定に通ずる考えである。また語り手は「専制君主」« autocrate¹⁶⁾ »を「忌まわしい政治形態」と呼んでおり (CM, 280)、権力の極集中を避けるために三権分立を採用したのは当然の帰結であったと言えよう。さらに彼は神権政治を「専制的神権政治」« théocratie despotique »と呼び、これを一種の専制として扱っている (CM, 283)。

なお各政体の否定を繰り返しながら、無政府状態 anarchie についても「生まれながらに自由な人間の権利にとって、この上なく不条理で、この上もな

く侮辱的で、民衆にとって最も耐え難い」(CM, 280) と拒否している。彼は無政府状態による無秩序が人間の自由を損なうと考えた。

2-2. 自由の維持

メルシエが理想とする共和国がどのようなものかという問いに対して、上で概観した各政体に対する否定は、彼の共和国が「どのようなものでないか」を教えてくれるのみで、直接的な回答は得られない。ではメルシエは単に現状批判に終始したのか。共和国とは「18世紀的でない国」としか説明しえないのだろうか。

彼は共和国の本質に自由の維持を挙げる。「スイス人は共和国の本質をなす点、つまり自由の維持において、そして他人の自由を侵すことがない点で秀でていた」(CM, 131)。ここで言う「自由」とは、やはり18世紀的な支配の否定としてこれに対立する概念であり、身分的な不平等、社会的なヒエラルキーに対するアンチテーゼである。元来「共和国」« République »とは「古代ギリシャでは、独自の憲法によって統治されるさまざまな都市が共和国 *république* と呼ばれる¹⁷⁾」ものであり、かつ『紀元2440年』序文には「プラトンとともに精神を集中して、彼と同じように夢想することにする」(CM, 28) とあるから、メルシエがこれら古典的な共和国観を下地に理想社会を建設したことが察せられる。

そして自由の維持にまつわる彼の主張は、王制の否定と首長の存在の肯定との矛盾を解消してくれる¹⁸⁾。「権力を制限した上でなら、首長 *chef* を持つことは、それが共和的な国家であったとしても、あらゆる国家にとってよいことである。[...] 王制は庭に置かれる案山子のようなものだ」(CM, 228) と書くメルシエは王制を拒否しながらも首長の存在の維持を試みる。彼が危惧したのは王制が権力の集中によって専制に向かうことであり、王 *roi* や首長 *chef* の権力を制限することでその権力を国家の重要な一要素に留め、個人の自由と権利を保障すべきだと言うのである。ゆえに彼はその理想社会に三権分立を採用し、「法律が手綱を握る」(CM, 228) 法治国家を打ち立て、徹底して

権力の集中を避けた。彼にとっての自由とは専制に対する抵抗そのものであり、モンテスキューがそうであったように、あらゆる支配からの脱却による自由の実現と、法の遵守による制限を矛盾するものとは考えなかった。¹⁹⁾

ただし、理想社会において「特殊な、あるいは不測の事態は、君主の英知にゆだねられる」(CM, 227) ことから、王の権力は司法権のみにとどまらないように思われる。加えて「私からすれば、ヨーロッパはもはや広大な一国のみを形成せねばならない。そしてあえて私が願うとすれば、それはヨーロッパが唯一で同一の支配のもとに団結することである」(CM, 203) といった記述からは、25世紀においてもなお実現されていないものの、メルシエは立憲君主を戴く啓蒙専制主義による立国を（それもヨーロッパ規模の共同体を）真に理想的な政治と考えていたことが分かる。法の下に啓蒙された長を置き、公共の自由を保障する、メルシエの考える君主は啓蒙専制君主の典型といえる。²⁰⁾

2-3. 市民の資質について

統治の在り方としてメルシエが自由の維持を主張する一方で、共和国には民衆の側にも持つべき資質が存在している。

[...] その人が食べることしかできないと思われる場合には、都市から追放します。蜜蜂の共和国において、共同の分け前を貪ることしかできない蜜蜂がみな、巣箱から追い出されるのと同じことです。(CM, 141)

ここで蜜蜂の比喩に見られるのは極めて現実的かつ合理的な社会システムである。²¹⁾メルシエが構想する理想には、無条件に全員を救済するといった楽観はなく、市民に対してはその資質が要求される。社会全体への貢献、すなわち「労働と工夫」(CM, 261) を怠り、私欲にまみれ、私益を貪る者は共和国から追放される。自由は決して利己主義 *égoïsme* の容認を意味するものではない。

われわれをすっかり腐敗させ、それまで尊敬されていた絆 *nœuds* を断ち切ったあのひどいくつもの勅令、利己主義 *égoïsme* を公認し、市民を孤立させ、彼らの一人一人を、死んだような、孤独な人間にしまったあの野蛮な洗練ぶりは、国の将来の運命についての涙を、ただただ私に絞らせるばかりでした。[...] しかし習俗に致命的な打撃が加えられたことに、さらにもっと苦痛を感じていました。愛し合うべき人々の心の間には、もはや結びつき *liens* がなくなったのでした。(CM, 262)

利己主義はその独善的で自己中心的な態度が他者と習俗を害し、人々の絆を断つものであるが、これは社会を「分裂させ」る専制に対する批判とその意識を共有している。またメルシエは王権の抑制と並んで市民が「国家と一体をなす」(CM, 228) 点に改革の要点を置いており、共和国における「自由」は身勝手なふるまいを許容しない。理想社会において「自由」は支配からの脱却を指すと同時に、法の順守と民衆の「結びつき」を両立させる装置として機能する。自由まつわる主張の要点は理想の社会参画の形を提示することにあるのだ。そこでメルシエは18世紀の国民の参画の姿勢と自身の意識の相違について以下のようにいう。

[...] 愛国心とは的外れの美德である。自身のためにしか生きていない者、自分のことしか考えない者、震えることを恐れて口をつぐみ、目をそらしてしまう者、それが良き市民なのだ。そういう者の慎重さと穏やかさは称えられさえする。私はといえば、黙っていることはできないし、見たことを言うつもりだ。(CM, 260)

ここには当時の国民の参画の姿勢に対してメルシエが抱いた批判意識が現れている。彼の意図は自国の状況に対して国民がいかに利己的で無自覚・無関心であるか、そうでなくとも意見を発することを恐れる心がいかに国益を損なうかを訴えることにある。

社会・政治について、彼はその体制を憂うだけでなく市民の態度について強い危機感を表明している。『紀元 2440 年』における「政治」の話題は国家の政治体制に関する訴えであると同時に、民衆に対する参画の呼びかけであり警鐘だったのである。ここで「政治」は単に統治行為を指すにとどまらない。関心は体制と市民の隔たりに置かれ、ゆえに彼は双方に対して改善の必要性を示した。こうしてメルシエの政治的関心はモンテスキューの政治論やルソーの教育論に見られるような、当時の啓蒙思想家らが共有する市民・社会の啓蒙活動へ向かう。

3. 18 世紀フランスの「政治家」メルシエ

3-1. 18 世紀フランスへの視線

『紀元 2440 年』における理想社会の特徴は 18 世紀フランスとの時間的連続性の中にこれを描いた点にあるが、このことは 18 世紀フランスが理想の未来をはらんだ社会であることを前提に据えるメルシエの楽観を示している。たとえば本作には「18 世紀」と「フランス人」を表す 2 つの象徴画が登場し、ここに当時の社会に対する彼の評価を見て取ることができる。まず「18 世紀」を示す象徴画について、語り手はこれを眺めながら以下のように述べる。

画家は、十八世紀を一人の女性の姿で表現していた。この上なく気取った装飾が、非常に美しい繊細な顔立ちを損なっていた。[...] 目は生き生きと輝いていたが、少し不自然な微笑みが、口を歪ませていた。[...] 彼女の眼差しは、魅惑的だったが、真実ではなかった。両手に二本のバラ色の長いリボンを持っていて、それは飾りのようにみえたが、リボンは二本の鉄の鎖を隠しており、その鎖に彼女はしっかりと繋がれているのだった。しかし彼女はかなり自由に動くことができ、身振りをしたり、飛んだり、はねたりもできた。彼女は過度に動き回ったが、それは

(私が思うに) 奴隷状態を隠すためか、あるいは少なくともそれを安楽で楽しいものにするためだった。(CM, 212-213)

18世紀は美しい繊細な顔立ちをした女性として描かれるが、その女性は過装飾と浅薄な取り繕いによって美しさが損われ、また奴隷状態にあるがそれを隠し、ごまかそうとしている。ここには先ほど来確認してきた表面的で未熟な計画や隷従への批判意識が読み取れるが、とりわけ注目すべきは本質的に備えた美しさへの言及である。「フランス人」の象徴画についても、画を発見し立ち止まった語り手は以下のように述べる。

フランス人は、高尚で高潔な気品に満ちており、完成された表現を示していた。表情は独創的ではなかったが、手法は見事だった。想像力と才気が、眼差しの中に描かれていた。[...] 色彩は穏やかだったが、他の絵の中で見事に思う美しい光の効果も、力強い色調も、そこには認められなかった。互いに効果を損なっているごく細かい細部が多く、目が疲れるのだった。数え切れない群衆が、小さな長太鼓を持ち、大騒ぎをして音を立てていた。群衆は大砲の轟音をまねているつもりだったのだ。それはか弱く、東の間のものであると同時に、興奮し、活気のある熱だった。(CM, 214)

フランス人の国民性について、ここでも過装飾や実行力の不足に対する批判が強調されるが、一方でその本質たる「気品」が讃えられている。すなわちフランス人は本質的に美質を備えているにもかかわらず、計画の成熟と実践を怠っているためにそれが損なわれているとメルシエは考えているのだ。ここで必要とされるのは細部の装飾ではなくむしろ「真実」や「単純さ」である。語り手は「独創性」はさておきその「手法」を評価しているが、メルシエが強調したのも「計画」そのものの出来如何よりもその成熟がおざなりになっていることに対する批判であった。「もしフランス人が自分の計画を

計測し、成熟させ、持続させることができれば、輝かしい美質は、フランス人を世界第一の国民としただろう」(CM, 230) という楽観のもとで本作を著したメルシエは墮落した 18 世紀フランスの回復可能性を信じ、理想社会の実現を夢見た。理想社会において「パリ人は自然的、政治的、市民的権利 *droit naturel, politique et civil* については、はっきりした基礎知識を持って」いて、「自分の冗談 *plaisanteries* に実体を与えることも学んだ」(CM, 287) というが、これこそ計画の成熟が慣習として根付いた理想状態であり、このパリ人に対してメルシエは「政治家」« *homme d'État* » の称号を与えたのである。

3-2. 「政治家」について

「フランス人の名誉は、いつも強力な原理であり、最も賢明な体制に勝るものだ」(CM, 230)。メルシエの政治観においては体制以上にその精神性が重視され、体制の内側にあるその成員の性格が重視される。彼によれば「政治」は体制の練磨と精神の陶冶、形態と性格の両面の改革によって理想化されるが、後者は前者に勝る原理である。『紀元 2440 年』における「政治家」の解釈の要点も同様で、メルシエはすでに巨大な概念である「政治」のさらなる拡大を恐れない。理想の「政治」が国家の政治体制の改革だけでなく共和国市民の改革を求めたように、「政治家」は政治に携わる役職を指すだけではない。より広義で一般的な意味を持ち、象徴的・比喩的に「計画の成熟と実践が可能な市民」に与えられる称号を指すのである。ゆえに本作における「政治家たるべき」という主張は全市民に適用され、「政治家」にまつわる彼の主張は、理想社会の実現に向けた民衆の啓蒙の文脈で理解することができるのだ。

第 1 章 3 節で述べた通り、民衆の啓蒙の希求は 18 世紀啓蒙の思潮からして何ら革新的なものではない。啓蒙の時代の哲学者たちは自由と平等、封建的諸特権の廃止等の諸改革を望み²²⁾、知識の普及と旧弊の撤廃を通じて社会の改良を目指した²³⁾。メルシエがその例に漏れないことは明らかである。また

彼はルソーやディドロ、ヴォルテールを筆頭に様々な作家や思想家を参照し、言及する。その他古典古代と同時代のイギリスへの関心も強い。それゆえ『紀元 2440 年』における彼の主張も、メルシエに独自の思想であるとの断言は難しい。

その中でも「政治家」概念は本作に特徴的なものである。彼は本作を通してあらゆる身分・職分にある全市民の啓蒙を訴える。この試みは彼を啓蒙の思潮の一支流に位置付けると同時に、「政治」という巨大なテーマについて、その語の対象者をなお拡大しようとするメルシエに独自の思考実験的な理想を示している。当時の悪弊の否定とそうした否定の残余となる本質的な美質の尊重を通じた理想社会の建設、ここにうかがえるのは自身が生きる社会の適切な発展への切実な願いである。『紀元 2440 年』においてメルシエは、新たな思想を生み出す思想家ではなく、既存のものの整理と熟考そして時にはその廃止を通じて社会の発展をなす「政治家」そのものであった。

おわりに

本稿では、『紀元 2440 年』におけるメルシエの理想社会が全市民による計画の成熟と実行を前提とした社会であることを確認し、その理想が「夢」の形式選択に深く関わっていることを指摘した。また作中で提示される「政治家」概念について分析し、体制と市民の精神の双方向からの改革、特に後者に重点を置いた改革思想が本作で展開されていることを明らかにした。

ここで描かれるのはまさに社会の理想化に向けた彼の「計画」である。そして本作は「あるものごとをあらゆる面から見て、すべての関係の中で見る」(CM, 173)という言葉の通り、改版を重ねられ、その章と文量を増やしてゆく。つまり彼の計画はいまだ発展途上であり、ゆえに本作は「政治家」の、すなわち計画の成熟の必要性を説く著者本人による実践の書であると言えよう。

[注]

- 1) 出版年については議論があるが、1770年末には執筆中であり、1771年に出版されたと思われる。出版の歴史については Everett C. Wilkie, Jr., « Mercier's "L'An 2440" : Its Publishing History during the Author's Lifetime, Part I », *Harvard Library Bulletin*, 32 : 1, 1984, p. 5-35 に詳しい。なお本作は1771年版の時点では44章で構成されていたが、再版とともに加筆がなされる。1786年版では全82章になるとともに、短編 *L'Homme de fer*, *Songe*. が追加され、さらに1799年の版では序文が追加される。
- 2) 以下、『紀元2440年』と略記する。
- 3) Diane Berrett Brown, « The Pedagogical City of Louis-Sebastien Mercier's "L'An 2440" », *The French Review*, 2005, vol. 78, no. 3, p. 470-480.
- 4) クリシャン・クマー『ユートピアニズム』菊池理夫・有賀誠訳、昭和堂、1993年、96頁。
- 5) Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française*, éd. intégrale de Jean-Jacques Pauvert, Paris, Gallimard ; Hachette, 1956-1958, 7 vol., s.v. « rêve ».
- 6) Louis-Sébastien Mercier, *L'An 2440 : Rêve s'il en fut jamais*, [1771], éd. Christophe Cave et Christine Marcandier, Paris, La Découverte, coll. « La Découverte / Poche », 1999, p. 35. 『紀元2440年』からの引用は以降、(CM, 35) のようにして本文中で頁数を示す。なおすべて拙訳を用いたが、以下の邦訳を参考とした(ルイ＝セバスチャン・メルシエ『紀元二四四〇年：またとない夢』原宏訳、野沢協・植田祐次監修『啓蒙のユートピア』、第3巻、法政大学出版局、1997年、1-274頁)。
- 7) Antoine Furetière, *Dictionnaire Universel*, [1690], Genève, Slatkine Reprints, 1970, 3 vol., s.v. « chimère ».
- 8) Charles Renouvier, *Uchronie*, [1876], texte revu par Hubert Grenier, Paris, Fayard, 1988, p. 10.
- 9) 『タブロー・ド・パリ』(*Tableau de Paris* ; 1781-88) の序文でメルシエは次のように述べている：「私は、本書において、もっぱら「画家」として筆をとっているのであって、「哲学者」としての思索はほとんど何も行っていないということを言っておかなければならない[...] 一つ一つの章にはそれぞれ歪曲を誘うものがあったが、私はどの章でもそれを退けた。[...] 私はただ一般的な描写をただけであって、[...] どうしてもそこからはみ出すことはできなかったのである。」(メルシエ『十八世紀パリ生活誌』原宏訳、岩波文庫：(上)、1989年、19頁。)
- 10) 1786年以降の版に追加される章でメルシエの「新大陸」に対する関心はいっそう顕著である：「クリストファー・コロンブスは二つの世界を一つにした。[...] この発見以上に偉大な革命などありはしない。」(Louis-Sébastien Mercier, *L'An deux*

mille quatre cent quarante, rêve s'il en fût jamais, suivi de l'Homme de fer, Songe, [1786], Paris, Hachette, 1972, 3 vol., t. 1, p. 259-260 ; これ以降 *L'An 2440* [1786] と略記する。

- 11) メルシエの現実主義的側面については、アンソニー・ヴィドラーの先行研究等が挙げられる。彼は『紀元 2440 年』に見られる「都市の刷新計画」« *projets de rénovation urbaine* » を「現実の中に置かれたユートピア」« *utopie dans le réel* » とする。(Anthony Vidler, « Mercier urbaniste : l'utopie du réel », dans Jean-Claude Bonnet (dir.), *Louis Sébastien Mercier (1740-1814). Un hérétique en littérature*, Paris, Mercure de France, 1995, p. 234.)
- 12) 案内人はフェヌロンの諸作品を「理性と感情の幸運で稀な調和が見られる」と評価し、ルイ 14 世の宮廷で『テレマックの冒険』を著したことを「驚くべき、そして賞賛すべき美徳」であるという。彼がフェヌロンを評価する理由のひとつには、権力に媚びない暴露的な作風が挙げられよう (CM, 171)。1786 年に追加される章「出版の自由」においてメルシエは、ルネサンス期イタリアの画家アレティーノについて「最も惨めな作家だった。なぜなら自身の筆で君主らを威嚇することを知っていながら、差し出された金を前に臆病にも屈して筆を曲げてしまったからだ」(*L'An 2440* [1786], t. 3, p. 117-118) とし、社会的・経済的な力におもねる文筆家を批判している。
- 13) 『永久平和論 *Projet de paix perpétuelle*』の著者である *L'abbé Charles Castel de Saint-Pierre* (1658-1743) を指す。メルシエは *Mon Bonnet de nuit* (1784-1785) においてサン＝ピエールについて「彼は優しく崇高な愛情で人類の大義を抱きしめ、永遠に美しい魂の空想であろう永久平和の見事な計画を抱いた。[...] 彼は世界から奴隷制度、専制、悪徳、不幸を減することを、そしてとりわけ王たちの手からその節度ない野望を供する恐ろしい剣を奪い取ることを望んでいた。人の生が不活性であった間、彼の諸作は夢と思われていた。しかしここでは、諸作品は輝かしい痕跡を示しており、その痕跡は正義の女神の視線をひいた」(*Louis-Sébastien Mercier, Mon Bonnet de nuit, suivi de Du Théâtre*, éd. Jean-Claude Bonnet, Paris, Mercure de France, 1999, p. 91) と書く。メルシエは当時空想的と考えられた永久平和の理想を評価していた。またルソーも『永久平和論抜粋 *Extrait du Projet de paix perpétuelle*』と『永久平和論批判 *Jugement sur le Projet de paix perpétuelle*』でこの言論に反応している。
- 14) 1764 年に小麦の輸出を認めた法律。自由化ののちパンの価格上昇が続き、1768 年に飢饉、暴動が起きた。1770 年には一時廃止される。
- 15) « *calcul* » は数学的な計算を指すほか、「企てられた方策、熟慮の上の意図、(大規模な) 構想」(*Émile Littré, op.cit., s.v. « calcul »*) を指し、諺に「誤った原理や仮定の上で構想や推論をすると、人は計算 *calcul* を誤る」(*Antoine Furetière, op.cit., s.v. « calcul »*.) とある。『紀元 2440 年』におけるこの語も上述の諺のように、ロワ

イヤル仏和中辞典の「打算, 計略」といった軽蔑的な用法で理解できよう。

- 16) 「いかなる法的な統制にも従えられない主権者」(Émile Littré, *op.cit.*, s.v. « autocrate ») また作中には「法の上に立つたった一人の人間が、政体 *corps politique* の中にあらゆる不正や不公平を招き、避けがたい結果として、その崩壊を早めるだろう」(CM, 229) とある。
- 17) *Dictionnaire de l'Académie française*, éd. 9e actuelle, s.v. « république ».
- 18) 1786 年の版にも見られる主張である。「王の権威と国内の自由は互いに損なうことなく結びつく」(*LAn 2440* [1786], t. 1, p. 247.)
- 19) 自由とは「君が私の行うのを欲することを権力が行わない」こと、また「その行為が君に対する強制を意味しない限りで、私が欲することをを行うこと」である。(ピエール・マナン『自由主義の政治思想』高橋誠・藤田勝次郎訳、新評論、1995 年、141-147 頁。)
- 20) 『啓蒙思想の百科事典』、日本 18 世紀学会：啓蒙思想の百科事典編集委員会編、丸善出版、2023 年、446 頁。
- 21) 「蜜蜂の共和国」はバーナード・マンデヴィル『蜂の寓話』(1714) にも見られる比喩である。ただし、マンデヴィルは「私悪は公益なり」として利己心やプライド、虚栄心と言った悪徳が公益になることを風刺的に描いており、その思想は徹底して悪徳を排した理想社会を夢に見るメルシエの試みとは必ずしも一致しない。(バーナード・マンデヴィル『新訳 蜂の寓話：私悪は公益なり』鈴木信雄訳、日本経済評論社、2019 年。)
- 22) ダニエル・モルネ『十八世紀フランス思想：ヴォルテール、デイドロ、ルソー』市川慎一・遠藤真人訳、大修館書店、1990 年、156 頁。
- 23) 植田祐次編『十八世紀フランス文学を学ぶ人のために』、世界思想社、2003 年、119 頁。

(大学院博士前期課程学生)

Un idéal d'« Homme d'État »
dans *L'An 2440 : Rêve s'il en fut jamais* de Louis-Sébastien Mercier

Yuta ABE

Nous examinons la société idéale que Mercier a tenté de concevoir dans son roman utopique, *L'An 2440 : Rêve s'il en fut jamais*, et les plans de réforme sociale par lesquels il comptait y parvenir. Dans cette œuvre, le discours de l'auteur est certes tourné vers un avenir utopique, mais il commence par reprocher aux Français de son temps leur penchant envers les « projets » irréalisables : il y voit un trait de caractère propre à sa nation, et il fait de la nécessité d'y remédier un objectif primordial des réflexions politiques développées dans le livre. Les distinctions à établir, dans *L'An 2440*, entre le rêve de l'avenir et le « projet » de société, revêtent dès lors un enjeu essentiel, dans la mesure où elles sont susceptibles de clarifier sa pensée politique.

En mettant l'accent sur la critique préalable des « projets » défectueux qui abondent en son siècle, Mercier souligne l'importance capitale de la pratique concrète : c'est le critère déterminant de la définition de l'« homme d'État ». La recherche de l'idéal doit à ses yeux s'appuyer sur un processus de politisation, qui consiste à mobiliser tous les citoyens par la diffusion des Lumières dans la société tout entière. À cet égard, la publication d'un livre tel que *L'An 2440* contribue directement à la maturation politique d'un projet pratique, et l'homme de lettres se revendique « homme d'État » par le simple exercice de sa vocation.

En effet, l'aspect le plus intéressant du discours de Mercier ne consiste pas tant dans la nouveauté de ses conceptions, qu'il emprunte à de nombreux penseurs de son temps, que dans une redéfinition de la notion même de politique. Son goût pour les réalisations concrètes se traduit par un élargissement du domaine de la politique à toutes les formes de participation civique à la sphère publique : le signe le plus éloquent en est l'extension de la catégorie d'« homme d'État », qui ne désigne plus de manière exclusive les détenteurs du pouvoir, mais qui est mise à la portée de chaque citoyen. Les leçons d'optimisme réaliste et rationnel de Mercier sont toujours à méditer.